

一八世紀イギリスの市議会の「出席簿」

青木 康

私が一八世紀イギリスの地方都市の市議会のことを少し詳しく調べ始めて、かれこれ二〇年になる。もともと中央政界における政党政治が主たる関心事であった私は、ウエストミンスターでの下院議員の政治的動きを深く理解するためには、地方にある議員それぞれの選出区の様子をもっとよく知らなければならぬと感じて、地方都市の方へと研究の軸足を移していくことになった。そして、一九九七年から、サフォーク州ベリ・セント・エドマンズ市のことについて、さらに二〇〇八年からは、サマセット州ブリジウォータ市のことについても、地元の文書館が所蔵する一次史料も用いて調べるようになった。幸い、どちらの市についても市議会の日誌(Minutes)の現物が残されていたので、まずはその日誌を読んでみることから調査を始めたが、そうこうしているうちに、私は市議会議員の会議への出席状況を一覧する表(出席簿)を作り、そこからさまざまなことを読み取る作業自体に面白さを感じるようになった。上記二市のうち、ブリジウォータについて言えば、そこでの当面の研究目的は、同都市選挙区における一七六八年および一七八〇年の総選挙と市自治体の関係を説明することであったが、その研究のた

一八世紀イギリスの市議会の「出席簿」(青木)

めの基礎作業として始めた市議会の「出席簿」作りは、上述の個別研究自体が一応の成果を得て終了した後も、対象時期を前後に拡大して続けられ、現時点では、一七四六年五月二六日から一八一七年九月二九日までの七〇年余りの通算四五〇回分の会議の出席簿が完成している。

市議会の日誌では、毎回の会議の記録の冒頭部分に、その会議に出席した者の名前が記されている(時には、その時点で在籍している市議会議員全員の名前が書かれていて、出席者にはチェック記号が付けられているという形式のものもある)。これを見ることにより、ある議員がいつのどの案件の審議に実際に加わっていたかをうかがうことができ、政治史の研究にとって大いに参考になる。私を含めて議会政治史の研究者なら誰でも、ウエストミンスターの下院の研究においても、これと同様のことができるといって昔から考えているが、残念ながら、議会下院の日誌(*Journal*)では、日々の出席議員を一覧することができない。他方、私が手がけたベリ・セント・エドマンズやブリジウオータの市議会については、議員数が二、三〇人程度(定員は、前者が三七、後者が二四)と処理しやすい規模である(これに対して、同じ時期のウエストミンスターの下院議員は五五八人、出席率はあまり高くないにせよ、多い日では本会議出席者が四百数十人に及んだ)こともあって、各回の会議の出席者が完全に記録されているのである。本欄には細かい分析的な議論はなじまないで、大雑把な書き方をするが、出席簿をながめていると、市議会議員には大別して二つのタイプがあるように感じられる。一八世紀半ばのブリジウオータの市議会議員の例で言うと、多くの議員が市議会に選出されてしばらくの間は比較的勤勉に会議に出席するが、その後、市議会議員は、相対的に高い出席率を維持して、いろいろな役職に頻繁に就任し、やがて市長にも選ばれる(さらには市長に再任される)といった、市政参加に積極的な有力議員と、最初の勤勉期

を過ぎると出席率が低下していき、議員歴が長くなっても（市議会議員は原則として終身である）、市の役職にはほとんど就かない不熱心な議員という二種類に分かれる。また、このタイプ分けとは別に、市議会議員は政治党派でも区別され、党派性が会議への出席率に影響することもあった。市議会議員が同市のパトロンとなっている貴族を支持する派と反対する派とに分かれて厳しく対立していた一七八〇年代前半のブリジウオータにおいては、市長を出している派（市政の与党）の議員は出席率が高く、反対派の議員は出席をサボり出席率が低下するといった現象も見られた。

一八世紀イギリスの市議会の日誌の出席者名の記載に特徴的なのは、議員の席次が強く意識されているという点である。これもブリジウオータ市の例を紹介すると、出席者欄の先頭に書かれるのは、市長が出席している限り、必ず市長であり、ついで前年度の市長、さらに特定の役職者が続き、それから残りの一般の議員の名前が出てくる。同格の議員の間では、議員就任の先任順が守られる。したがって、通常、出席者欄の最後尾には、選出されて間もない議員の名前が書かれることになるが、市議会議員となつてすぐの先任順最下位の議員であっても、重要な役職に就くと、その席次は急上昇して、市長や前年度市長の近くに名前が書かれる場合もある。ただし、その議員も、翌年度に役職を離れると再び出席者欄の最下位に戻ることになる。市議会の出席簿を作成する際に、一人ひとりの議員の出欠だけでなく、出席した議員が日誌の出席者欄で何番目に書かれているかということにも注意をはらっていると、市議会議員や市自治体役職者の入替りがどの程度の頻度で起こっているのかとか、議員が市議会入りしてからどれくらいでどんな役職に就くのが普通なのか（すなわち、市議会議員のキャリアパスはどのようであったのか）といった、市自治体の支配構造を考えるうえで重要なことが自然に見えてくるのである。

一八世紀イギリスの市議会の「出席簿」(青木)

市議会議員の席次ということに関連して付言すれば、私が市議会の日誌を読んでいて、もっとも興味深く感じた記事のひとつは、一七六〇年代後半に政治的な理由から市議会議員の職をいったん辞した議員が、市議会に復帰することになった際、同議員の先任順の席次は、辞任以前のものをそのまま用いると市議会が議決したという記事であった。市議会が、他の市政の重要事項とならんで、一議員の席次に關して、わざわざ議案決定まで行っている、それほどまでに議員の席次を大切にしているということは、一八世紀イギリスの市自治体をもつ近身分制的な性格をはっきりと示しているように思われる。

市議会の出席簿は、一八世紀イギリスの市自治体について、実に多くの興味深いことを語ってくれる。私はこれからもこの出席簿作りとその分析にかかわっていきたいと思う。「出席簿」作りは、市議会の日誌という史料が残っている限り、それほど難しい作業ではない。ただし、それをある程度長い期間にわたって誤りなく作っていくのは、やはり根気のいる作業である。私自身が今後どれほど検討対象の間を広げ、さらに都市を増やしていけるか、正直あまり自信はない。本稿から市議会の出席簿作りのおもしろさと言義を感じとって、その作業に参加してきてくださる方が現れることを願って結びとしたい。

(本学グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター特任教授)